指定都市市長会シンポジウム in 京都

京都から

「人口減少社会克服のモデル」をつくる！

～地方創生って何ですのん？～

講演録

平成27年9月6日

主催：指定都市市長会

共催：京都市

次 第

日時：平成27年9月6日（日） 午後1時30分～午後4時

会場：京都学園大学 京都太秦キャンパス みらいホール

1 挨拶

門川 大作（京都市長）

津田 大三（京都市会議長）

2 基調講演

テーマ：「大学都市・国際都市 京都の未来」

講演者：山極 壽一（京都大学総長）

3 パネルディスカッション

テーマ：「地方創生って何ですのん？」

パネリスト

山極 壽一（京都大学総長）

松山 大耕（妙心寺退蔵院副住職）

門川 大作（京都市長）

（進行）井上 あさひ（NHK京都放送局アナウンサー）

【挨拶】

門川 大作（京都市長）

大変な雨の中お集まりいただきありがとうございます。

指定都市は、今、全国で20になりました。人口減少社会にどう対応するか、そして、東京一極集中を是正していくことが重要であります。指定都市は、その役割を果たそうと様々な取組をしています。そのような中で、京都でシンポジウムを開催させていただくこととなりました。

指定都市といっても、都市によって特性があります。京都は75%、4分の3が森で、その森の中に千年を超える歴史あるまちや集落があるのですが、それが限界集落になっている。そういう都市もあれば、横浜や川崎のようにどんどん人が増える都市もある。指定都市の果たす役割は様々ですが、特性を踏まえて、指定都市が元気になるというよりも、その都市の周辺と水平連携をしながら、元気な日本をつくるのが大切だと考えています。そういうことで、指定都市市長会と京都市とで、このシンポジウムを開催させていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

さて、人口急減社会がやってくる、このままでは日本のまちの半分以上が消滅しかねないというメッセージが発せられて、ようやく日本全体で少子高齢化が大きな課題となってきました。少子高齢化、人口減少が進む中で、東京一極集中が加速している。人口も富も情報も東京に集中している。これは先進国では日本だけの現象で、是正しないと日本の未来は危ないと国でもようやく認識され、まち、ひと、しごととの創生に関する法律が制定され、創生本部をつくり、全国でこの問題に対処していこう、ということになりました。

京都ではまち、ひと、しごとも大事ですが、京都に伝わる日本の「こころ」も大事にしていこうと、まち、ひと、しごと、そして「こころ」の創生を大切にしていこうと、この1月に「まち・ひと・しごと・こころの創生」の本部を立ち上げ、指定都市の中では1番早く、3月にその中間案をまとめ、市民の皆さまに提示し、御意見をいただくとともに、議会でも議論を重ねていただいています。今日も津田議長をはじめ多くの議員の先生方に御参加いただいております。

人口減少、東京一極集中は、人間の生き方、地域社会のあり方、働き方、会社の経営の問題でもあります。これは行政主導、政治主導でできるものではなく、もちろん行政も政治もしっかりと役割を果たさなければなりません、一人一人に考えていただくということで、取組の提案募集を行いました。行政に対してアイデアを提案するものではなく、自分たちのしてきた取組について、パートナーを探し、主体的に市政のあり方を考えて欲しいという趣旨で提案をお願いしました。4月から7月の短い期間で、インセンティブのない募集であり、10件か20件か応募があれば良いと思っていましたが、ありがたいことに137件の素晴らしい提案をいただきました。これらはすべてホームページにアップし、京都創生の「お宝バンク」として、さらに皆さんの知恵をあわせて磨きをかけていこう、ということ取り組んでいます。

総合戦略の案をお手元に配らせていただいているかと思いますが、皆さんの御意見を募集しています。国の方針では、来年の3月中が策定の期限ですが、京都では今年度の上半期にまとめ、オール京都で、チーム京都で行動していこう、と考えています。

今日は山極京都大学総長と松山大耕退蔵院副住職にお越しいただきました。京都の特色、強みを生かして、地方創生をしていこうと。「大学のまち」は京都の素晴らしい特性であり、また、宗教、学問、文化芸術、経済、これらのあらゆる根底に、精神文化があると思います。その意味で相応しいお二方にお越しいただいたと考えています。

そして、何よりも、先ほど申しましたように、人口減少社会をどう克服していくかは一人一人の生き方です。それぞれが「自分ごと」として、あるいは「自分たちごと」、さらには「みんなごと」として考え、行動していく、そんなきっかけになればありがたいと思っています。

もう1点、東京一極集中を是正していくために、国の機関の地方への移管という大きなテーマがあります。これにつきましても、山田知事や商工会議所など、多くの方々と相談させていただき、例えば文化庁を京都へ、という取組を進めています。そういったことについても、この場で理解が深まればと思っています。

それでは、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございます。

津田 大三（京都市会議長）

「物言えば、唇寒し、秋の空」。みなさんこんにちは、京都市会議長の津田大三でございます。本日のシンポジウムの開催を心からお祝い申し上げます。本日は、山極壽一京都大学総長から「大学都市・国際都市 京都の未来」をテーマに基調講演を頂戴し、地方創生についてのパネルディスカッションがあると伺っています。冒頭の句は松尾芭蕉が座右の銘にしたいと言った句で、人の短所を言うと後味が悪く、心寂しい思いがすると。そこから転じ、余計なことを言うと災いを招くという意味だそうです。

「地方創生」という言葉は「人口減少社会にどう対応していくか」の言葉の置き換えではないかと思っています。しかし、このことは、突然起こったわけではなく、以前から言われてきました。それが今、皆さまと共に考えていかなければならない時期が来ているということです。このシンポジウムを契機にこれからの京都と日本の未来を考える素晴らしいシンポジウムになることを心から願っています。

【基調講演】

テーマ：「大学都市・国際都市 京都の未来」

講演者：山極 壽一（京都大学総長）

みなさんこんにちは。昨年の9月までゴリラを追っかけてアフリカのジャングルにいましたので、総長になってからまだ1年経っていません。勉強中ですが、今日は少し大それたことを言おうと思っています。ただ、勉強不足なのでとんでもないことを言うかもしれませんが、御容赦ください。

まず、「日本の状況」を皆さんと共有したいと思います。今、日本では人口構成が急激に変化しています。そして東京一極集中、財政赤字、若者の就職難、国際化の低迷。女性の社会進出の低迷、これ、なかなか改善が進んでいませんね。皆さんも実感がおりかと思えます。

日本の人口構成の、2015年、2020年、2025年の変化予測ですが、要はベビーブームの世代がどんどん上に上がって、2025年にはいわゆる後期高齢者、75歳以上になるということです。それによって、国の1人あたりの医療費の負担率が上がっていく、それを支える若者人口がどんどん減っていく、こういう少子高齢化が、現代の日本が抱えている問題です。高齢化の進行、15歳から65歳までの労働人口がどんどん減っていき、65歳以上の人口の割合が増えていく、という時代にさしかかっています。

また、先に市長もおっしゃった限界集落、つまり居住者のいない無居住の地帯がどんどん増えるという見込みがあるということです。村や町が消滅するという危険が今後増えると予想されていますが、大学も、この影響を受けて「18歳人口の縮小」という問題が現在進行中です。つまり、大学に入学する年齢の若者の数が減っているのです。しかし、「大学進学率も低迷」しています。そこで、国から大学に要請されているのが「高大接続と入試改革」、つまり、初等教育、中等教育、高等教育をどのようにつなぐか、そのゴールとして大学は何を用意できるのかと言われてしています。

それにもかかわらず教育費はOECD諸国の中で非常に低レベルです。だからとりわけ国立大学法人は「自己資金化」を進め、そのための「制度上の制約」も国から解いてもらわないとならない時代になりました。

若者から見れば、これまでの古い大学教育を一新しないとイケない。つまり、IT化の時代にあって、いまだ古ぼけた教育をしているようでは世界に打って出られないと言われてしています。大学の知名度を高めるためには国際大学ランキングを上げろと言われ、また、日本から海外へ出て行く学生、海外から日本に来る学生をどのように交流させるかがもう1つの大きな課題となっています。

そして、とりわけ産業界からの大学への要請が非常に強まってきており、社会に役立つ教育をしてほしい、職業人教育をしてほしいと言われてしています。そしてこの度、国立大学の機能分化ということで、地域に貢献する大学と国際水準で研究・教育をする大学を分けて考えようという政府からの提案がありました。

今日はこのような細かいことをあげつらうつもりはありません。今日は京都の問題です。18歳人口は少なくなっていますが、大学への進学率は51%で止まっており、伸びていかない。これが現状です。諸外国の進学率はどんどん伸びており、他の国と比べると、その差は歴然としています。また、各国は進学率の目標を立て、学生数が増えることを条件に、教育に費やす費用を増やしています。これは日本にはありません。OECD各国との比較グラフでは、日本の51%は、他国と比べると非常に低く、お隣の韓国は71%で、随分日本より高い。その一方で日本の大学数は近年急激に増えています。国公立大学は減っていますが、私学が大きく増加しています。現在私学は606あり、国公立と併せると782の大学があります。

さて、京都大学はというと、最近調査したのですが、学生数は伸びています。しかし、教員や事務職員は伸びていません。だから、教員や職員の負担が最近高まっている現状にあります。京都大学の入学者数、これは学部生ですが、学部生はあまり増えていません。規則がありますので。一方、大学院の修士課程の入学者数は非常に伸びています。博士課程もちょっと伸びています。つまり、国立大学は学部生ではなく、大学院より上の学生をどんどん受け入れているというのが現状です。

外国人研究者や留学生の受入もどんどん増えており、とりわけ、修士課程の入学者数が増えています。つまり、日本で一定の技術や手法、考え方を学びたいと。地域別では特にアジア人が多く、1000人を超える学生が今、京都大学に来ています。しかし、海外から来る学生と海外へ行く学生の比率がアンバランスで、京都大学へ来る海外の学生のほとんどはアジアですが、京都大学から海外へ行く学生の行先のほとんどが北米で、かなりの割合を占めています。アジアは、来る学生に比べて、行く学生が少ないというのが現状です。

一方、研究者はかなりバランスが良く、来る研究者と行く研究者の比率は大体一緒です。では、海外から来る学生や研究者の環境条件はどうかというと、これは日本の全国の国立大学の現状ですが、大学が設置する留学生宿舎を提供できているのは、半分にも満たない状況です。京都大学はとりわけ提供できる宿舎が少ないので、京都府や京都市にお願いし、様々な土地をお借りしながら留学生宿舎を増やそうとしています。特に、大学院の留学生の宿舎が不足しており、日本で高い科学技術を学ぼう、様々な学問を学ぼうという学生の住居条件が劣悪です。一方、研究者については、学生と比べると宿舎を提供することができています。

現在の若者たちの持っている特性は、私が学生の頃と比べると随分と変わりました。昔は、有名、あるいは魅力的な先生から必要な知識を貰う、あるいは図書館でいろんな資料を調べて自分にとって必要な知識を探すといったことが大学に来る主たる目的でした。しかし、今、知識は人から人へ伝えられるものではなく、ほとんどの知識はインターネットにあるので、そこにアクセスする方法さえ分かれば、自分の得たい知識はどこでも得られる時代です。また、今、学生は携帯を持っているので、自分でいちいち判断するのではなく、そのたびに仲間に連絡をし、仲間に判断を仰ぐこともできます。自己決定するより、仲間と一緒に考えようという時代です。

しかし、逆に対人交渉や自己決定能力が落ちている時代である、とも言えます。だから、大学は知識を伝授する場所ではなく、人と人が出会い、考え、物事を決定する能力をつける場所になりつつあります。「共感力を使った学びの場」をきちんとつくらないといけない、大学は考え方や実践の方法を教える場所である、と。であるのであれば、大学だけが学びの場ではありません。大学の外へ研究者も学生も職員も出て、様々な場で、様々な人々と交流しながら必要な知識を学ぶことが必要なのではないでしょうか。そこで私は、京都大学の活動方針を窓、「WINDOW」という構想にまとめました。

京都には数多くの神社仏閣がありますが、必ず門があります。大学もこれまで「門」という言葉で表現されてきました。狭き門と言いますね。東大には赤門があります。そもそも門というのは、内と外では世界が違う、ということを表しており、ひとたび門をくぐれば、そこは聖域であるから、態度や考え方を改めなければならない、身を清めなければならない、という場所であったわけです。しかし、今申し上げたように、世間も世界もどんどん動きが変化してきているし、必要な知識は大学だけで得られるものではありません。であるならば、大学は「門」ではなく「窓」にしよう、双方向の移動や知識の交流が可能な「窓」と位置づけ、人々が自由に入出入りできる場所にしてはどうかと。そこで、WINDOWという英語の一つ一つの文字を使って、活動指針を作りました。

Wは、Wild and Wise。野生的で賢い学生を育てる。賢いだけではダメだということです。そしてIは、International and Innovative、これも重要です。国際的に活躍できる能力を育ててほしい。それから、京都は三方を山に囲まれ、自然が身近で、京都大学の学生はこの自然と接しながら高い品格を学んでき

ました。そういうことを一貫してやりたいと思い、Natural and Noble を。Diverse and Dynamic という多様な動きを捉える感性も重要です。そして、京都大学が誇る独創性、これは1人でできるものではなく、違う分野の研究者や学生たちが集まって、切磋琢磨して議論を交わす中から生まれるものです。その議論はまた、楽しいものでないといけないということで、Original and Optimistic を掲げました。議論する対象は学者だけとは限らず、様々な分野の人たちと楽しく話をすることが重要です。また、とりわけ今の時代は、女性の活躍の場をきちんと用意しなければ世界は変わりません。これも大学が率先して行っていくことが重要であろうと、Women and Wish を掲げました。

今日のテーマでもある「大学のまち・京都」というのは、今後とりわけ重要になると思います。京都には38の大学があり、周辺を合わせると50以上の大学が集中しています。京都市も商工会議所も「大学のまち・京都」という標語をもとに様々なビジョンを発表し、実行してきました。大学コンソーシアム京都というのは、20年以上の歴史があり、大学が連携して様々な学生の将来を導くことをこれまで行ってきました。こうした活動に基づいて、新しいビジョンを立てなくてはならない時代に来ているのであろうと思います。

その為には、京都がいろんな自覚をもって、学術や学生と連携していかないといけないと思います。そこで、国際都市・京都ということを考えてみたいと思います。国際都市の条件って何だろう。

私が思うところは、まずは、一定の規模が必要でしょう、ということです。あまり小さくは国際都市としての機能を発揮できません。そして、とりわけ重要なことは、世界に発信できるユニバーサルな魅力があること。あとは、比較的簡単にアクセスできること。交通網を完備し、情報を的確、正確に伝えるシステムが整っていないといけません。また、安全であることも必要です。さらには、収容力がないといけませんし、不易と革新ということが見えないといけません。少なくともこういう条件が整っていないといけないと思っています。

では、京都はどうなんや？と考えると、京都は非常に国際都市として魅力的な特徴を持っています。たとえば、都市の規模。東京は1300万、ニューヨークは840万、ロンドン800万、ローマは260万、パリは220万という人口を抱えています。京都は147万人であり、世界の国際都市と比べると規模が小さいです。しかし、この小ささが魅力だと私は考えています。

このくらいの規模であるということは、いろんな分野の人たちがどこかでつながっていることができます。同じ分野の人だけでなく、分野を超えてつながれる、というコミュニティを京都は今でも維持しており、これを魅力として活用していくべきであると思います。

あと1つ、医者が多いこと。人口10万人あたりの医者の数は日本一多いです。京都府は273人もいる。2番目の徳島は270人、3番目の東京都は266人です。これは、安全なまち、病気で倒れても大丈夫だという安心感を与えるに充分です。

もう1つは学生のまち。人口100人あたりの学生数は、京都府では5.29人で日本一です。2位の東京都は4.87人。3位の滋賀県は2.40人ですから、群を抜いて京都には学生が多い。学生は京都にとって大きな財産であることが言えます。何をもって財産かというと、学生は革新を呼び起こしてくれます。新しいことをやってくれます。京都は古き伝統と歴史のまちであることと同時に、たくさんの学生を抱えて新しいイノベーションを期待できる、より新しい発想が期待できるまちだということです。

では、京都の魅力とは何なのだろうか？まず、1200年の歴史を持つ、成熟した都市です。歴史と伝統だけでなく、いろいろな考え方や試みを許してくれる、成熟した都市であることです。その証拠に、京都にはベンチャー企業がたくさんあります。そして、京都の企業は京都を本拠にして、東京に行かない、本社を東京には移さないのが大きな特徴ですが、それは京都が革新性を保障してくれる場所だからです。それは、成熟都市としての許容力が支えているのだと思います。そして、古都の品格が

あり、質の高い衣食住がある。これは京都人が「ほんまもん」と自負しているところで、他の都市の住民に比べ、我々は高い生活文化の質を保っているという誇りからくるものだと思います。また、この京都人の自負心を満足させるような膨大な数の祭りと行事があります。これも歴史性があり、まさにほんまもんのお祭りです。とりわけ重要なのは、外からの眼差しに慣れた人がいるということであり、自分たちだけで自分たちの生活を作っているだけではなく、外の人を巻き込んで、外の人々の批評に耐えるような暮らしを自ら作り上げているのが、京都の大きな特徴です。

その結果として、非常に多面的で重層的で多面的な暮らしやまちができて上がっています。とても襍（ひだ）が多く、そこに折りたたまれている多様な暮らしが見えるのです。宗教、芸術、学術、産業、芸能、花街といった原理の異なる世界が重なりあって存在しています。だからこそ、海外から来る人がリピーターとなって、何度かやってくるうちにいろんなことが分かってくる。そういう魅力に富んでいる証拠だと思います。

そして、伝統と革新と遊び。この遊びというのが重要だと思いますが、成熟都市ということにも関わります。いろんな遊びを許してくれる、アバンギャルドな発想、好みを許容してくれるまちである、ということが大切なのだと思います。

しかし、京都に不足していることもたくさんあります。たとえば、京都の外に京都ファンはたくさんいますが、情報がバラバラで、皆、違った京都の情報を得てやってきます。これを何とか一元化して、世界に上手く発信できないものかと。まだまだいろんなロスが存在しています。そして、情報の発信力、とりわけ国際的な発信力が不足しています。

また、近年、京都の大きな課題となっていますが、集客力があっても収容力がないことです。観光客は年間5000万人を超えていると言われてはいますが、これを収容できるホテルや旅館、施設がない。これを何とかしないとイケません。

さらには、異文化交流ができる施設が足りない。そういう場所がないために、ただ人々がどんどん来て、動き回っているだけです。どこかに集まって、楽しいことができる場所が少ない。また、我々学術に携わる者にしてみますと、大きな会議場が少ない、ということがあります。たとえば1000人規模の学会をしたい、と思っても場所が限られ、年間の予約が詰まってしまっている、となる。そして、人々の動きを支えるための交通網が、決して完備されているとは言えません。交通渋滞が、季節によっては大変なことになっています。何とか早急に解消しなければならないでしょう。

だから、京都への提言として私がぜひ申し上げたいのは、かなり物騒なことを言いますが、国際都市というのは、ロンドンもパリもローマもそうですが、国が滅びても残るのです。滅びるといっても、国が変わってもです。政権が変わっても京都は残る、これは私が保障してもいいです。だからこそ京都は安定した国際都市でいられるわけです。たとえば、マドリードはアラブの人たちに長年占領されていました。キリスト教世界が復活しても、マドリードは、アラブの痕跡を残しながらも、しっかりと立っている。その都市は残っています。そういうことは、京都の1200年の歴史の中でも何度も行われてきたわけですが、京都という町はきちんと残っています。それが国際都市として信頼できるものです。

現在はグローバルと言われてはいますが、ローカルがだんだんと頭をもたげてきました。ローカルから発して、それがグローバルとなる。つまり、地域から考えたものをグローバルにしていくという発想です。京都は世界の中でもそういうことができる非常に重要な都市だと思っています。京都が誇る文化遺産を世界の研究者が使い、また、大学を通じて世界の知的遺産を京都の人が使う、そういうことができる場所だと思います。それには、国際的な発信力とブランド力をきちんと作らないとイケません。ブランド力が今の京都には足りないと思います。京都の中にいる人は、そのブランドのことを十分にわきまえています。そのブランドを正確に国際的に発信しなければ、そのブランド力は本物にはなりません。それをこれからやらなくてはイケないと思います。

そのために、この少子高齢化の社会の中で、老若男女の新しい組合せによる組織作りをすることが必要だと思います。特に、京都の伝統と歴史を生かして、世界の歴史と伝統ある都市と、その都市の知的財産とをつないでいくことが京都に求められる役割だと思っています。

同時に学生のまち・京都であるなら、世界の学生や学術的な場所とつないで、京都を中心として発見とイノベーションを育てたらいいのではないかと考えています。

一方、日本への提言は、高度成長期の日本の発展を構想するのではなく、低成長時代の、つまり、人口はどんどん減っていくんだということを前提とした発想をするべき時が来ているだろうと思います。少子高齢化を支えるまちづくりをしなくてははいけません。具体的には、コミュニティを重視した施設を作らなければならない、共に生きる楽しみを見つけられる都市づくりということです。コミュニケーションの質や方法は変化しました。それに沿って、コミュニティというものも適切に作らなくてははいけません。

そして、今は移動が非常に楽になった時代です。人々は、1箇所定住するのではなく、二重生活をする。東京でしか仕事を選べないなら、とりあえず東京で仕事をしてもいいが、週末には京都に帰る、岡山に帰る、そこであるコミュニティに属して、その地域づくりをする。そういう時代に差し掛かったのではないかと思います。

人間は、2箇所でアイデンティティを持ってもいいだろう、そのための制度設計をしないとはいけません。税金は1箇所にしか納められないというのは間違いだと思っており、そういうことを国は施策としてやるべきではないかと思います。

また、今は18歳の若者だけが学ぶ時代ではありません。60歳、70歳になった人たちが、新たに今の時代を知ろう、世界を知ろうと大学にやってきますので、その学びの場を大学は提供すべきだと考えています。日本だけを考えるのではなく、世界の視点から日本を眺め、その上で日本を意識し、変えていくことが国際化にとっては必要ではないでしょうか。であるのであれば、京都を日本の文化の中心としてだけではなく、世界の文化と学術の中心都市として育つような発想を、是非、京都の皆さんだけでなく、日本の知識人や財界人など、様々な人たちに考えてほしいと思います。

最後に京都アカデミーという発想を皆さんに披露したいと思います。京都にはいろんな知的財産が散在しています。伝統や芸術、自然などの遺産や、過去から連綿と続いてきた様々な思想などがちりばめられています。しかし、その間の連携ができていません。それをつなぐのは学術であろうと思っています。

京都大学は、これまで京都の皆さんに支えられて、学生や知識人を育ててきました。これからは京都大学と京都の38の大学がそれらの遺産をつなぎ、京都の文化的価値、国際的価値を高める努力をすることが必要であり、行政と産業がこれに協力して連携をしていくことが求められているのではないのでしょうか。その結果として、世界から多くの人々がやってくる。これは観光という1つの言葉で括られるかもしれませんが、中身が多様です。学術的な観光もあれば、お寺や神社にお参りする宗教的な観光もあるでしょう。遊びのためにやってくる人もいます。そういった様々な観光を有機的に結びつけることが今後は必要だと思っています。

だからキーワードは「連携」です。プラットフォームは大学がやろう、という時代なのではないのでしょうか。市長や知事、商工会議所などの協力の下、動物園、植物園、水族館と大学が連携するようになりました。博物館や資料館と大学が結びつこうとしています。

今後は、美術館やコンサートホールと大学、神社仏閣や教会と大学、伝統工芸などのものづくりと大学、企業やNGOと大学が結びつき、そうした小さな、大きな様々な施設を京都の中にちりばめて、地域の人たちとも連携をしていく。それが国際的になっていくということが望まれるのではないだろうかと思っています。

京都大学が誇る精神は対話です。対話を根幹とした自由の精神です。これは昔から京都大学が誇ってきた学問の姿勢で、これを崩すことなく、大学を越えて京都へ広げていく。そして京都の人たちを呼び込んでいくことができればいいな、と思います。フィールドワークは、もう1つの京都大学の大きな精神です。大学の外に出よう、大学の外には我々が学ぶべきことがたくさんあるんだと。私は学生たちにどんどん海外へ出ましょう、日本の国内にも探検に行きましょう、ということを奨励しています。

国際フォーラムは進んでいますし、グラフでも見たように海外からの留学生は増えています。そういう人たちを増やしながらか、国際交流を通じて京都のブランド力や学術力を高めていきたいと考えています。

今年の4月には、学問の域を超えて、芸術と遊びの精神で垣根を超えましょうか、ということで、大蔵流狂言師の茂山千三郎さんとゴリラ狂言、プロジェクション・マッピングの土佐尚子教授を交えて「アートな京大をめざして」というシンポジウムを行いました。7月には「京都大学解体」というテーマで、いろいろな立場の人に話をしてもらいました。既存の枠を越えて新しいことをしようということを、今やろうと思っています。

そして、実現したいと思っているのは、京都大学発のサイエンスマガジンです。京都で様々な分野の人たちが話し合っ、世界を新しく変えるという試みをどんどんしていくことができれば、京都発の新しい文明論というもの生まれるのではないかと考えています。皆さまにも様々な意見を伺い、それを生かして、新しい京都を作ることができればいいな、と思っています。

どうもありがとうございました。

【パネルディスカッション】

テーマ：「地方創生って何ですかのん？」

パネリスト：山極 壽一（京都大学総長）

松山 大耕（妙心寺退蔵院副住職）

門川 大作（京都市長）

コーディネーター：井上 あさひ（NHK京都放送局アナウンサー）

井上アナウンサー

では早速パネリストの方々にお話を伺っていきます。まずは自己紹介からお願いします。

山極総長

先ほど冒頭に申し上げましたが、今、国立大学は政府から機能分化を要請されています。ですが、私は京都は特別だと思っていて、京都大学は地域と共にあるということが1番のキーポイントだと思っています。京都大学は、京都に支えられて118年の歴史を歩んできました。これをさらに進めるためには、もっと京都との連携を強めることが必要だと思っています。

松山副住職

こんにちは。松山です。ここから徒歩10分くらいの所にある妙心寺の塔頭の副住職をしています。今日のテーマは「まち・ひと・しごと・こころ」ということで、先ほどの市長のお話にもありましたが、京都はやはり、宗教都市、「こころ」の都市であります。ですから、地方創生を考える中で、やはり「こころ」というものは京都から発信していくべきであろうと考えています。今日はその素晴らしい機会をいただきありがとうございます。

門川市長

どうぞよろしくをお願いします。

井上アナウンサー

改めまして、進行は京都NHK京都放送局アナウンサーの井上あさひです。

今日のパネルディスカッションのテーマは「地方創生って何ですかのん？」ですが、私、京都に参りまして5箇月で、ちょっとこのアクセント、緊張するのですが、この地方創生という言葉、最近よく耳にしますね。人口の減少、人・モノ・お金、そして情報が全て東京に集まるという東京一極集中など、今の社会は様々な課題を抱えています。これらの課題を解消しないとどうなるのか、また、解消し、克服していくために様々な取組を進めている京都市ですが、今日、門川市長から京都市の取組などについて御紹介いただくとともに、山極総長と松山副住職から、それぞれの御専門の立場から御意見をいただきながら、京都の今と未来について皆さまと一緒に考えていきたいと思っています。会場の方も、パネルディスカッションをお聞きになって御意見がある、という場合は、お手元のシートにご記入いただき、お帰りの際にスタッフに渡してください。頂いた御意見は、「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略（案）のパブリックコメントとして取り扱いをさせていただきますので、御了承下さい。

それでは早速パネリストの皆さんにお話を聞いていきたいと思えます。先ほども御紹介いたしました、このパネルディスカッションのテーマは「地方創生って何ですかのん？」ですけれども、人口、特に子どもが減少する状況、若者が東京に集まる状況を何とかするために、今、国を挙げて地方創生の取組が進められています。まず、門川さん、京都での取組は後ほどじっくりお聞かせいただきたいと思うの

ですが、国と地方が一緒に取り組もうとしている地方創生とはどういうものなのか、そして、どうして今、地方創生が話題になっているのか、このあたりのお話を頂けますか？

門川市長

山極総長、素晴らしいお話をありがとうございました。又、先だっては、京都大学と京都市が、京都の都市の魅力を高めるために様々な取組を共にやっという協定を結びました。包括的な協定は初めてです。これからもよろしくお願いします。

京都の都市の特性を生かしていこうということですが、この京都学園大学がある場所は、実は元々浄水場でした。節水型社会が進展し、4つあった浄水場も3つあれば充分ということで、上下水道局が2年をかけて水の循環を全て変えました。動脈を静脈にするようになかなか大変だったのですが、市民の皆様の理解のもと、その跡地を活用し、京都学園大学に亀岡とここのダブルキャンパスにさせていただきました。聞くところによると亀岡も含め、応募者が3.3倍になったと。大学のまちとして土地を有効に使っていこうという取組が進んでいます。

さて、創生という言葉ですが、昔はありませんでした。12年前の平成15年に、国家戦略として京都創生を掲げました。当時、京都は厳しい状況でしたが、京都は日本の宝だ、世界の宝だ、従って、まず、京都市民が京都を維持していくためにあらゆる努力をしようと。建物の高さ規制やデザイン規制、屋上の看板を撤去してもらうとか。市民が独自にできることはやっということ。

しかし、京都市だけではできない、国家戦略としてではないとやっいけないこともあります。それを国に要望していこうと。その時に使った創生という言葉が全国で使っいかれるようになりました。ありがたいことです。

さて、人口減少がいかに厳しいかというのは、先ほどの山極総長のお話でも御理解いただけたかと思います。同時に東京に集中する、これも是正していかなければなりません。そのときに、客観的な事実がどうなっているのかなという、今、1億2,700万人を超えている日本の人口が、2060年には8,670万人と、3分の2になります。そのさらに50年後には4,000万人くらいになると。

京都も大変な状況です。45年後には、147万人から110万人くらいになってしまいます。しかし、ありがたいことに、議会でも議論していただいた「はばたけ未来へ！京プラン」を作ったときには、147万人を超えている人口が、この10年間で2.2%減少するだろうと想定していましたが、子育て環境を良くしていこう、教育を良くしていこう、産業を活性化していこう、観光も活性化していこうという種々の取組をしてきたおかげで、2.2%の予想が0.4%に留まりました。6,000人しか減っていない。ここまでは何とかいけたと。

しかしこれから大変。なぜかという、これまでの20年間は、京都に入ってくる人より京都から出て行く人が多かったのです。20年前は6~7,000人、8年前も3,600人、京都に入ってくる人より出て行く人が多かったのですが、3~4年前から京都に入ってくる人が多くなりました。昨年は入ってくる人の方が2,700人多く、京都で子育てしたい、京都で働きたいという人が増えました。東京に、大阪に、滋賀に出ていかれる人が減ってきた。こういうことで、何とかあまり減少せずにすんでいます。出生率は低いです。指定都市で、3年前はベベから2番目でした。2年前に、ベベから5番目になった。喜んではいられません。1.11が1.22まで上がりましたが、全国の平均よりはまだ低い。国もそうですが、京都も何とか出生率を上げていく取組をしていこうと。

しかし、これは人々の生き方の問題です。京都市も大規模なアンケートをしました。すると、結婚していなくても結婚を希望する人は8~9割おり、子どもを授かりたい人も非常に多い。平均すると1.8人の子を授かりたいと。結婚しておられる方であれば、2人、3人欲しいという人も結構多いのです。これらの人々の希望が実現する京都のまち、日本の国をつくれれば人口減少に歯止めがかかる、こ

うということが明らかになりました。これをどのように実現するか、皆さんと考え、行動していきたいと思えます。

井上アナウンサー

ありがとうございます。どうしたらこのまちに住みたい、このまちで結婚したいとなっていくのか、ということについても、これからじっくり話していきたいと思えます。

門川市長、京都市では「まち・ひと・しごと・こころ京都創生」総合戦略（案）をまとめていらっしゃいますね。パブリックコメントも実施されているということで、私も読ませていただきました。京都は、歴史や芸術、文化、観光のイメージが非常に強いです。また、お寺が多い宗教都市、大学のまち、というのもそうです。アメリカの雑誌「トラベル・アンド・レジャー」の「訪れてみたい都市ランキング」で2年連続1位を獲得されました。

でもそれだけではなく、皆さん、京都に森林がどれだけあるか御存知でしょうか？ なんと4分の3もあるということで、驚きました。京都は三方を山に囲まれ、自然が豊かなまちであることを改めて感じました。

一方で、山や森林というと、過疎に悩む限界集落と呼ばれる地域を連想しますが、京都も同じ状況があるということです。京都は街中にも周辺部にもそれぞれの歴史や伝統があって、個性がある。それが京都の魅力でもあると感じます。あと、西陣織や京友禅などの伝統産業で働く人も商品の数も減っているということです。跡継ぎや担い手の減少も、人口減少の1つの影響だと思えます。

でも、私は何よりも印象に残ったのは、タイトルにもある「こころ」という言葉。国では「まち・ひと・しごとの創生」ですが、ここに「こころ」の創生が加わっています。また、市が作る計画は「市がこうしていきます」というイメージが強いですが、この戦略は市民などと行政が共に「自分ごと」、人ごとではなくて「自分ごと」として、人口減少に総力戦でとりかかる、となっています。

門川さん、この「こころの創生」とはどういうことか、改めてお伺いしたいと思います。あと、「こころの創生」、そして市民と行政が「自分ごと」として総力戦で挑む、ということに込められた思いについてお聞かせください。

門川市長

子どもを産むのはリスクだ、親の高齢化で介護もリスクが増える、こういうことを言う人がいます。京都に伝わる、日本人が大事にしてきた「こころ」、先祖を敬い、子孫に、未来に、ふるさとに思いを寄せる。おかげさま、もったいない、こういう「こころ」を大事にし、今を生きる人間が力を合わせて共に生きていく。その根底には、一人一人を大事にする、人間としてその尊厳を尊重する、同時に人が人を大事にする。信頼、絆、家族、地域社会で助け合いながら生きていくと。これが、根本だと思えます。

どうもそれが、経済優先、効率化優先、あるいはそうしたことから、東京一極集中になり、東京は素晴らしいまち、世界と対抗という意味では、東京にも頑張ってもらわないといけません。そこは、経済優先、効率化優先のまちです。そこからちょっと距離を置いて、日本人が大事にしてきた「ほんまものこころ」を、大都市の中ではまだ比較的伝わっているこの京都において、人口減少社会をどう克服していくか、家庭や地域社会をもう一度再生していく、創生していく、そんなモデルをつくりたいと思え、あえて「こころの創生」という言葉を入れました。多くの方の共感を得られました。ある人は、京都だから言えるな、いや、京都が言わないとあかん、と。なかなか行政の世界で「こころ」を真っ正面に据えるのは難しいのですが、もし東京で、政治の中心で「日本のこころの創生だ」と言ったら議論が起こるかもしれませんが、京都に伝わる「日本のこころ」と言っても、誰からも異論が出なかった、というのは、日本社会における京都の役割でもあるのかな、と思っています。

結婚し、子どもをはぐくむ、それを皆で大事にしていく。そういう社会を皆でつくっていく、というときに、「こころ」の問題を抜きにしては語れません。「こころ」を真っ正面に据えて、多くの人に共感をしていただいたことが、今回一番うれしいところです。そこに誇りと責任を持ちながら取り組んでいきたいと思っています。

井上アナウンサー

ありがとうございます。「こころの創生」、これは京都ならではの観点だと思いますので、この後、山極総長、松山さんにもじっくり伺っていきたいと思います。

山極総長、先ほどの基調講演でもお話いただきましたが、京都には大学が多くあり、大学のまちですが、大学の教育は、人の「こころ」をつくる場所でもあると思います。今の門川市長のお話も踏まえまして、山極総長のお立場から、「こころの創生」についてのお考えをお聞かせいただけますでしょうか。

山極総長

文部科学省の大学設置審議会の委員を2年やったことがあります、いろんな大学を回りました。大学の定義、専門学校と大学の違いは、一般教養、基礎教育というものを、いろんな分野にわたって教えることが条件となっています。大学では、市民として高潔な品格を備えた教養を教えることが原則です。ここで、世界市民として、人間として、高い人格を身に着けるための素養を高めることが絶対条件とされています。大学は、社会に出て行くまでに基礎的な「こころ」を身に付ける場所だと思っています。

井上アナウンサー

ありがとうございます。松山副住職、京都は多くの神社仏閣がある宗教都市です。御専門である臨済宗は、まさに「こころの創生」に関わる分野だと思いますが、日々御活躍されている中で、「こころの創生」についてどのようにお感じになっていますか？

松山副住職

「こころ」に関しては、最近、私達の仏教については葬式仏教だとか仏教離れなどと言われていますが、私は全くそのようには考えていなくて、益々重要性が増している気がしています。ホテルのコンシェルジュ、その中でもトップの方が認証される「レクレドール」というものがありますが、日本で開催される初めての国際会議が先週東京でありました。日本で会議をするからということで、日本のおもてなしについて私に基調講演をしてくれと。世界から集まったおもてなしのトップの人たちに対する私の講演のタイトルが「おもてなしの本質とは？」でした。思い切ってやったんですが。私もこんな京都観光おもてなし大使というバッジをつけていますので。

最近、オリンピックの招致の際におもてなしという言葉が使われましたが、今、日本全国がおもてなしをがんばろうと言っているのは、単にサービスを良くしよう、ということしかやっていないと思います。サービスとおもてなしは全く違います。そういうものはどういうところから来るのか、という話をしました。サービスには、お金が必要です。つまり、高いお金を払えばいいサービスを受けられる権利がある、これがサービスです。おもてなしは、まず、お金は必要ありません。かつ、その人だけに、その瞬間だけというのが、おもてなしなんです。

そして、最も重要なことは、主客が対等であること。私も寺に生まれ、10歳くらいからお盆のお参りなどもしていますが、高校生くらいの時に、ある老舗の和菓子屋さんの檀家さんのところにお参りに行き、お経の後にお茶とお菓子を出してくださいました。何も知識や経験がありませんでしたので、単純に「ああ、おいしいお菓子ですね」と答えました。そして、お茶碗がとてもきれいだったので、

御主人に「凄いきれいなお茶碗ですね」と言ったときに、私の母は古田というのですが、ずっと辿ると、古田織部のお兄さんの家系で、そのことを御主人は御存知で、「あなたのおじいさんの家系は織部の家系でしょ。貴方がお参りに来られるというので織部好みの茶碗で出したのです」と。そのときは、全く織部のことは知らなかったのですが、その御主人が親切な方だったので、そういうおもてなしをしてもらっていたんだと、初めて気づきました。

どれだけいいおもてなしをしても、その受ける相手が知識なり経験なりを持っていないと、そして、お互いの敬意がないと、良いおもてなしにはなりません。おもてなしの言葉だけが一人歩きして、そういった、互いの敬意とか経験とか、全くおもてなしの意味が分かっていない人がたくさんいらっしゃる。京都の凄いいところは、それを実際に実践されているということ。形だけでなく、本当にやっている人がいる。

この前、東京から来た人が「京都はおもてなしのまちと聞いてきたが、私は京都で良いおもてなしを1回も受けたことがない」と言われました。腹が立ったので、「あなたが期待しているのは、良いサービスでしょ。それはお金を払ってどこでも受けてください」、「京都で良いおもてなしを受けたいと思えば、あなた自身の勉強や経験が必要なんです」と、ちゃんと言いました。そういうことを堂々と言えるのは、京都です。それを実践しているから言える。おもてなし一つでも、「こころ」が関わっているのか、単なる言葉なのか、お金を介したサービスのことなのか。そこが、京都がおもてなしを提供できる場所ですね。

井上アナウンサー

ありがとうございます。さて、総合戦略（案）の5ページには、京都が目指すまちの姿が書かれています。少し御案内しますと、「一人一人がそれぞれの希望を実現しながら、日本伝統の美意識や価値観、家族や地域の絆など「日本のこころ」を大切に、安心して生き、働き、学び、暮らす。そして同時に、国内外から人々が集い、活発に交流する。そのことを通じて、単に「人の数」「人口」だけではなく、「人々の笑顔の数」が、より多く、将来にわたって持続する社会」。

これを実現するためにどんなことを行っていくのか。たとえば、共働きが増える中で、保育園に子どもを預けられるかどうかは気になるところです。京都市では2年連続、保育園の待機児童ゼロ人を達成されましたが、これを継続するなどの、子育て支援の取組。それから、全体の9割を占める中小企業の支援や、学生と中小企業の出会いの支援など、産業振興の取組。産業が賑わえばまちは活性化しますし、働き口も増えます。生活も安定し、仕事を求めて人もやってきます。また、学生が京都の企業に魅力を感じれば、就職して京都に住み続けてくれるかもしれません。あと、外国人観光客や留学生を増やす取組。まさに、観光都市、大学のまち京都の強みを生かした取組だと思います。

これらは一部ですが、まち・ひと・しごとの創生のために考えられた取組が、総合戦略（案）にまとめられています。

ところで、門川市長、先ほどお話いただきました「こころ」の創生、これは京都ならではのようですが、他の都市にはないもの、ということで、16ページ以降にまとめておられます。「日本のこころのふるさと」である京都がどのような取組を実際に行っていて、今後どうしていこうとお考えなのか、詳しく教えてもらえますか？

門川市長

はい。その前に京都市では、きちんとした基本構想を作っています。期間は2001年から2025年までで、徹底した市民参加の下に、市民の皆さんの意見を聞いて作りました。基本計画では35歳以下の若い意見をまとめようと、アンダー35の会議を作り、その座長をさせていただいたのが、松山大耕

さんです。

2001年に基本構想を作った当時、京都は流出する工場や大学、空洞化する都心部、停滞する産業、観光、風情を失いつつある街並み、発信力と想像力を失う文化や芸術など、深刻な危機にありました。これが15年前の京都の認識でした。そして後に言われる「失われた20年」。バブル経済が弾けて日本中が大変な時期ですが、その時は規制緩和の大合唱でした。都市間競争といった言葉も流行り、高いビルが建ちました。

しかし京都は、1000年を超えて人々が大事にしてきた生き方、「もったいない」とか「おかげさまで」、「おもてなし」、あるいは物事をとことん極めていく「きわみ」や精緻なものづくりの「たくみ」、挑戦する意の「こころみ」といった言葉で表現される生き方を再認識しよう、これをしっかり再認識したときに未来は拓ける、ということ、基本構想第一章の「京都市民の生き方」に掲げ、小さな東京にならない、京都の価値を「日本のこころのふるさと」とし、この間努力をしてきました。

おかげで観光面でも非常に都市格が高まりましたし、流出し続けていた人口が戻ってきました。たとえば大学ですが、20年前は大学生は13万人でした。当時の日本の18歳人口は200万人を超えていました。今は120万人くらいですが、大学生が京都には15万人います。京都市では、学生の人口が全体の1割になりました。ここまでは成功したと思っています。

ただ、大事なのは、生まれてくる赤ちゃんが少ない。晩婚化しています。大学進学率は、京都市内では70%近いです。日本全体では52%くらいですね。非常に大学進学率が高く、これはいいことです。しかし、女性は71~72%が大学へ行き、男性よりも5~6%大学進学率が高い。そのことが、という問題になるのですが、結果として京都は非常に晩婚率が高くなっています。未婚率が高い。

したがって、大学に行かれてどんどん社会で活躍し、かつ、多くの人が思っている「結婚したい」、「子どもを産みたい」という希望も実現する。こういうことで、山極総長にも以前、京都大学の中に保育所をつくりますよ、どうぞ、学生結婚を奨励してくださいと申し上げましたが、そういうことも両立するように挑戦していかなければならないと思っています。

井上アナウンサー

ありがとうございます。「こころの創生」、どうしていけば実現されるのか、という原点に戻るということも含めて教えていただいたように思いますが、加えて何かございますか？

門川市長

京都は大学のまちであると同時に宗教都市でもあります。京都市内にコンビニは500いくつかありますが、神社仏閣は2,000を超え、それ以外にも教会などいろんな宗教施設があります。大学の枠を離れて、アカデミー構想というお話も先ほどありましたが、それぞれの宗派や宗教施設が枠を超えて「こころの創生」、つまり、京都で暮らして良かった、京都で子育てして良かった、老後を京都で送って良かった、京都を訪ねて良かった、という仕組みづくりができたとき、これほど心強い、住みやすく、子育てしやすく、また、観光の面でも元気が出る、癒やされるまちはないと思います。

井上アナウンサー

今の御発言について、山極さんはお感じになったことはありますか？

山極総長

先ほどの講演の中で、「新しい老若男女の組み合わせ」で組織作りをする必要があると申し上げましたが、今、市長がおっしゃったように、京都は多面的な価値を持っているのです。たとえば、子どもを

育てるなら、しっかりしたコミュニティ、子どもは自分だけで育てるのではなく、いろんな人たちが協同して子育てするような仕組み作りが必要ですが、京都には、その仕組みがとりあえずはあります。それを求めてやってくる人が今後は増えてほしい。

あと1つは、京都には「こころ」の安定を求めてやってくる、いわゆる「こころ」の隠れ家として機能している部分があります。これには、多くの宗教施設がその役割を果たしています。

もう1つは観光。京都に学びにやってきます。この学びは、広く解釈すると、先ほど松山さんがおっしゃったようにサービスを求めにやってくるのではなく、自分を高めるために来る。それが京都的なおもてなしです。学びの場には一定のルールや修行が必要ですから、学びの場に立つ人は立場を超えて全部平等なんですね。そういう規則が京都には昔から連綿として流れています。それを求めにくる人がいるから、実は私達はそういう場を広げやすいのです。京都の多面性とはそういうことです。

だから、たとえば日本の人口構造が変わり、少子高齢化になるとしても、京都の人口構造は今後、違った形で動くかもしれない。それを我々は期待しないとイケないし、自らの手で作っていかないとイケないと思っています。

井上アナウンサー

ありがとうございます。「こころ」の隠れ家という言葉がありましたが、松山さんはいかがですか？

松山副住職

観光はここ30～40年で大きく変化しました。最初は seeing の観光でした。ただ単に見るという目的。金閣寺や清水寺を見物する。そこから次第に変わってきて、見るだけでは満足できない、何かをしたいという doing になってきました。たとえば舞妓さんになるとかお菓子を作るといったこと。最近はまだ少し変わってきて、ただおもしろかっただけではリピーターにならないので、旅の世界的な潮流であるのは being なんです。つまり、自分は何のために生きている？とか、何の為に仕事をしている？といった精神性を旅の中に求める人が凄く増えています。日常生活に戻っても使えるような哲学とかポリシーなどの「こころのお土産」を旅で得たいと思っている人が増えています。

京都に来る人が増えている背景には、こういう理由が絶対にあると私は思っています。うちの寺にも、国内外を問わず、老若男女来られ、たとえば坐禅に来られる人が凄く増えています。私が退蔵院に戻ったのは10年前でしたが、10年前は年間6,000人くらいだったのですが、今は年間3万人くらい来ます。日本の修学旅行生達がほとんどですが、海外からも来られるし、いろんな分野の方が来られる。先月はサッカーのオリンピック代表が合宿でうちの寺に来たり。最近では中国の人が増えていて、爆買いなどが報道されています。この前もうちの寺の売店に中国人の団体が来て、品物がなくなるのではないかと、これが爆買いかと思いました。それはさておき、そういう人もたくさんいますが、この半年で急に変わってきたと思うのは、経済的に成功され、超お金持ちの人達が仏教を学びたいと、わざわざ坐禅をするために妙心寺に来るようになりました。

私がダボス会議に行った時も感じましたが、日本の仏教にも凄く期待がかかっています。特に中国は、今までは高度成長期で、お金とマーケットだけを信じていればよかったのですが、ここ最近、高度成長も終わり、文化大革命で神社仏閣は全部壊れてしまい、「こころ」の依り所が必要なのではないかと。もともと仏教は中国から伝わりましたが、中国でなくなってしまったものがちゃんと日本に正しい形で残っていると。だから日本のお坊さんから仏教の正しい教えを学びたいと来られる方が半年ほどで一気に増えました。

京都の魅力とは、そういうところだと思います。何の為に仕事をしているのか、何の為に生きているのか、といったことを学べる哲学が1,000年以上にわたって蓄積されてきたのはまさに京都ですし、

東京や横浜や名古屋などの都市では絶対に提供できない価値とはそこだと思っています。

井上アナウンサー

実際に坐禅体験などをされた皆さんの反応はどうか？

松山副住職

非常に良いです。オリンピック代表が来る前にアンダー17という17歳以下の子どもたちがワールドカップに出る直前にうちに坐禅に来て、良い結果を残しました。で、日本サッカー協会は、ぜひオリンピックの代表もやらせたいとあって来られました。中国の人も次々に来ます。あとはスウェーデンの会社の社長、たまたま庭掃除をしているとき、うちに来て話をしているうちに感動され、休みの度に京都に来られます。何しに来るのかといえば、雑巾掛けをしに来るのです。わざわざ休みをとって。そういうところに、他では絶対に学べない学びがあると。

リピートするのは、ただ面白いだけではいけない。世界で1番の観光都市パリも、今、非常に危機感を持っています。何に危機感を持っているかといえば、リピーターの割合が減少しているのです。あのパリでさえ、危機感を抱いていますが、京都はリピーター率が非常に高い。それは「こころのお土産」を持って帰ることができるからだと思います。そこが京都の1番の強みだと思っています。

井上アナウンサー

言葉にしにくいことだと思いますが、その「こころのお土産」とは、何を感じているからだと思山さんはお考えですか？

松山副住職

先が見える、どこへ行ったらいいのか、やるべきことが見えてくるのではないのでしょうか。大学生でも優秀な学生はたくさんいますが、知識や能力があって優秀なだけ、という学生も結構います。大事なことは、その能力を何のために生かすのか、ということです。それを学生時代に学べるところが、この京都の1番の強みだと思いますし、それをしていかないと京都で学ぶ意義はないと思っています。

井上アナウンサー

先ほど山極総長がおっしゃった「こころの創生」につながる取組をどのように具体的になさっているのかについて、補足して頂けますか？

山極総長

「こころの創生」に直接つながるのかどうか分かりませんが、単にある学問をしたいと京都大学にやってくる、他の大学でも同じだと思いますが、最初の入口はそうだと思います。ただ、いろんな世界、自分の知らない世界が広がっているんだと、まず大学の入口で知るので。高校では、ほとんどの場合、答えが分かっている問いにどう適切に早く答えるかが求められます。大学では、答えがない世界であることを知るわけです。そこを探るためには、1つの方法ではなく、いろんな方法で答えにアクセスしていく。なおかつ、答えは1つではない。しかも、その答えを得るためには、自分で質問を発しないといけない。そのためには、いろんな分野、いろんな世界に足を踏み入れて、同じような問いを発している人達と学びを共にする必要があります。それが結果的に「こころ」をつくっていくことになるんだと思います。

井上アナウンサー

門川市長は今のお話についてどうですか？

門川市長

松山さんのお話に感銘しました。同時に山極総長の御講演の中でも、「対話とフィールドワーク」とおっしゃりましたが、大学コンソーシアムで、単位互換性の講座が500いくつあります。そこで、妙心寺の花園大学の講座で「禅と日本文化」に関する講座の人气がとても高い。150人の定員に対し、3倍も5倍もの希望者があり、意外と外国人や理系の人の希望者が多いと聞いたことがあります。このように大学の枠を超えて、京都のあらゆる文化、人の営みの1000年の蓄積の中から学べるというのが、アカデミー構想そのもの、これからのヒントになると感じました。

もう1つは観光です。観光の観は人生観や世界観の観であり、単に「見る」という字ではありません。深い観光、ほんまものの観光にきちんと対応できるのが京都だと。しかし、ここまで聞いて、退蔵院に私は坐禅をしに行ったこともないし、意外にもそういう京都の魅力を京都人自身が実践していません。感じていないのです。これを再度取り組もうというのが観光振興計画で、京都人が京都ファンになろう、京都通になろう、そのことをもっておもてなしをしよう。おもてなしができないのは、勉強していないからだとも私に言われそうですが（笑）。まちのあり方、人々の生き方、「こころ」のあり方を根源的に考えていくときに、この京都の素晴らしいあらゆる特性の中から、学びながら同時に発信していくことが大事だと思っています。

井上アナウンサー

私も本当に学んでいきたいと思えます。ここで休憩時間に頂いた皆さまからの御質問にお答えさせていただきたいと思えます。京都市外からお越しになった30歳代の男性の方からいただきました。

「私は京都市の近くに住んでいます。総合戦略の冊子を見てみると、京都市に外からやってくる人は今でも多いのに、その数をこれからも維持しようとされています。それだと京都市が一人勝ちしてしまうのではないですか。」という御質問ですが、門川市長、いかがでしょうか？

門川市長

鋭い指摘ですね。そうならないと思えます。東京一極集中、東京中心に渦を巻くように人が、モノが、富が集まる。これを是正し、全国津々浦々元気になるような国づくり、地方づくり、そのモデルを京都でつくろうということなのです。

50年前の京都市の人口は131万人でした。京都タワーの高さ、131メートルです。そのときの人口に合わせたのですね。今なら147メートルにしないとイケません。このままいくと、50年後には110メートルです。

このように京都市の人口は50年前には131万人だったのですが、そのとき、日本の人口は1億人になっていませんでした。これが、1億2,800万人まで増えました。しかし、京都は十何万人しか増えなかった。どんどん滋賀県に行かあった。大阪へ、何より東京へ行かあった。一方、京都に帰って来た人は、京都の大学にいたとか、京都出身とかの人が多いです。出て行ってしまった人が戻ってきたい、京都に仕事があるなどの条件が整ったので戻って来ることができる、こういう人々は歓迎しないとイケません。かつて6,000人、7,000人と出て行った人が帰ってくる。これを受け入れていかないとイケません。

この前、ある大学の学長がおっしゃったには、京都の大学で学べば、ふるさとを思い、ふるさとに帰って来る。東京の大学に行ったらなかなか帰ってこない。このように、京都の大学に行けば、世界で

活躍するのも大いに結構、ふるさとに帰るのも結構。同時に、京都の中小企業も人が不足しています。京都の中小企業の魅力を知って、京都の中小企業で頑張ろうという人も大いに大事と。こういうことで、決して京都が一人勝ちにはならないと思いますし、一人勝ちになってはいけません。全国に人口が戻ってくる。そのモデルを京都が作りたと思っています。

極端な例を挙げますと、大阪の御堂筋のあたりがどんどん建物の高さを緩和しています。京都はこの間、何故人口が増えなかったかという、徹底的に高さ規制を強化する、景観規制を強化する、今もやっています。従って良い会社はあるが工場はできません。こういう規制はぶれずに実行していく。従って京都にどんどん人が集まってくることにはなりません。

ただ、町家などの空き家がたくさんあります。あるいは京北はこの10年で6,000人から5,000人に減りました。雲ヶ畑などの周辺は限界集落になっています。そういう所へもっと人が戻ってくるようなまちづくりをしたいと思います。

井上アナウンサー

ありがとうございました。一人勝ちではなく、渦のように周りにも良い影響を及ぼすと。あちこちに渦ができると良い、「渦元」に京都になる、というお話ですが、今のお話、松山さんはどのようにお聞きになりましたか？

松山副住職

私は農学部出身なんですけど、皆さん、野菜を育てたことがありますか？野菜の種には必ず発芽率が書かれています。大体70%とか85%と書いてあるのですが、農学部に入ったときに農場実習というのがあって、そこでほうれん草の種を蒔いたのです。ほうれん草の種は結構発芽率が高いので、これはいいと。私は当初、発芽率がそんなに高いのであれば、と、土の穴の中に種を1個ずつ入れていったんです。すると、芽は出るが全部枯れてしまいました。農場に指導者のおっちゃんがいる、「おまえ、何しとんねん」と言われました。「野菜というのは穴の中に5つ6つの種を入れて、その全部の芽が出て、その切磋琢磨で1番伸びるやつを残すんだ」と。そうしないとどんな野菜でも枯れると言われました。まさにまちもそうだと思います。

今のこの危機的な状況の中で、京都が一人勝ちするからと、他に気を遣っている余裕はないと思います。とにかく全力でやる。すると周りも京都があれだけ頑張っているのだからうちも、と。それでこの関西の地域が良くなっていく。良いことはできることから全部やっていく。それを続けていって初めてこの地域なり、日本なりが良くなっていくのだと思います。一人勝ちなど、みみっちいことを言っているのではなく、京都ができることは全部やるというのでやっていかないといけないと思います。

井上アナウンサー

山極さんは、「人口減少社会克服のモデル」を京都からつくるということについて、どのようにお聞きになりましたか？

山極総長

京都がその魅力を前面に押し出してやっていけば、他の地方都市がその真似をするのではなく、その都市の魅力を伸ばすようになっていくだろうと思います。

今、日本が陥っている病というのは、みな東京のようになっていることです。規模だけ小さくて。どんどん同じようになっていくから、東京に先を越される。そうではなく、別の価値観というのをつくるべきです。

もう1つ、我々が使える資産はモビリティなんです。先ほど言った二重生活、三重生活ができるではないか、それを生かせばいい。若者は自由に動けばいい。動きを止めるようなことをすればイノベーションも刷新力も日本には起こりません。若者は自由に動き、自由に選択できるようにさせてあげればいい。

その上で、地方はどんどん魅力的にならないといけないわけで、京都が若者を引きつけるなら、どういう形で引きつけるのか。ただ、仕事を増やすだけなら、東京には負けます。そうではない魅力をつけるべきで、そういうことを皆で一緒に考えないといけません。若者だけではなく、老人も皆で動いていくわけですから、その動く人を自らつくり出すのも京都の新しい戦略ではないかと思います。

井上アナウンサー

先ほどの二重生活のお話で、「あ、いいかもしれない」と私も思いましたが、今交通網が発達して可能になっているから、従来はできなかったことも可能性として広がっているということですね。

山極総長

たとえば、子育てをするならこの地域、学ぶならこの地域と。今の若者は終身雇用なんて考えていないです。自分にあった仕事を選ぶ、また起業家も増えているので、自分でできると思えば仲間と一緒に会社を立ち上げる。東京ではものすごくたくさん出てきています。京都もそういう動きが出始めていますが、負けずにやればいい。それは東京的な仕事ではなく、京都にぴったりの仕事というものはいくらでもありますし、そのためには、京都にどういう会社があり、どういう産業があるか、学生自身が知っている方がいい。今、産業界の人々と話をしているのは、京都の学生は地元の企業を全然知らないということです。とりわけうちの大学の学生は、どんどん東京へ出ていきます。だから、インターンシップをしっかりとやりましょう。就職案内のインターンシップではなく、地元の企業に3箇月とか半年くらい行って、面白いことをやってみるといふ気運が生まれていいのではないかと。そういうコラボレーションをしていくべきだと思います。

井上アナウンサー

ありがとうございます。さて松山さん、文化庁について御意見がおありかどうか。お話を伺いたいと思いますが。

松山副住職

先週、小泉進次郎さんから電話があり、是非、文化庁を京都に持っていきたいと。地方創生をやるからには目玉が必要だし、省庁を移動するのに最も国民の理解を得やすいのは文化庁ではないか。それを東京だけが言ってもダメで、やはり地元の人たちの熱意や歓迎が大事であり、かつ、行政や関係者だけでなく、京都の若い人たちの想いを届けてほしいという、御意見をいただきました。

東京にも江戸の文化はありますが、やはり文化の中心は京都だと思います。それを象徴する意味で、文化の庁舎を京都に持ってくるのは地方創生の1つの目玉になるのではないのでしょうか。それには、先ほどのおもてなしの話にもありましたが、京都の私たち自身ももっと文化について勉強しないといけない。実践が求められていると思います。

井上アナウンサー

文化庁が京都に移転してくると、具体的にはどのように変わってくるのでしょうか？

松山副住職

文化の中心である意識はさらに高まると思いますし、海外から見ても東京に来てそのまま帰る人はいっぱいいるのですが、諸外国に向けてのPRという意味でも、文化の中心は京都でヘッドクォーターも京都にありますよ、と発信していけば、文化の都である京都が内外に知れ渡ると思います。

井上アナウンサー

京都ならではの視点もそこに大きな要素としてあると思いますが、門川市長はいかがですか？

門川市長

はい。この間、私5回ほど石破大臣にお目にかかり、10日に発売されるVoiceという雑誌には大臣との対談が掲載されますが、随分深い所で文化庁の京都移転を石破大臣は考えておられます。平副大臣と小泉政務官には京都に来ていただきました。地方創生全体のことを含めてですが、その時に、1000年を超えて京都は都であり、京都だけではなく全国津々浦々がつながって日本の文化を醸成してきた、という話をしました。

たとえば和食。昆布も鰹節も京都ではできません。着物もそうです。日本で一番いい繭が取れるのは福島県の川俣です。その時たまたま着ていたのが新潟県の小千谷縮でした。つまり、京都に伝わる日本の文化は、全国津々浦々の第一次産業、匠の技と連携して今日まで繋がってきた、と同時に、世界から魅力を感じてもらっています。

それがこの100年余り、東京中心の経済性、効率性を重視したために、全部その繋がりが切れてしまいました。ですから経済性も効率性も大事ですが、文化に関することは少し東京と離れた、この本場の京都に拠点を置いて、全国と繋がり、今疲弊している全国の第一次、第二次産業を元気になる。世界的なブランドである京都の西陣織ですら、最盛期の7.8%、京友禅は2.8%くらいです。全国の素晴らしいモノが疲弊しています。

東京中心ではこういう伝統産業も伝統文化も厳しい、と復興担当でもある小泉政務官に言ったら、福島の川俣に行ったらそのことを言います、と。京都に文化庁を置けば京都が元気になるのではなく、日本全体が良くなる。こういう取組。大学のまちも同様ですが、そういうことを提案し、実行していきたいと思っています。

井上アナウンサー

文化庁のお話ですが、山極総長はどのようにお感じになりましたか？

山極総長

日本は戦後科学技術立国、大国として世界の競争に勝ち、急速な発展を遂げました。一方、文化は競争ではなく、世界の文化がお互いに学び合うということでやってきました。もともと、世界との繋がり方や戦略も違うので、同じ場所で二つの戦略は取りにくいと思います。

学術に関しては、研究者の輪は世界中に広がっています。文化もそうです。だから学術と文化はとても繋がりがいい。文化と政治はどこかで拮抗します。技術と政治は直結しやすい。だから、文化的な外交をこれから進めるのであれば、少し東京と距離を置いた方がいいと思います。京都は非常に大きな世界とのパイプを持っている場所だと思うし、今後、その可能性は高いと思います。

井上アナウンサー

最後になりますが、京都の未来のために、という話に移っていきたいと思います。地方創生の取組を進めていくうえで大事なことは、人任せにせず、皆が「自分ごと」として捉えて取り組んでいくことだと思います。

この「自分ごと」「みんなごと」としての取組は活力を生み、その活力は次の一步につながりますし、周囲を刺激して、「渦元」というお話がありました。新たな取組を呼び起こすことにもなるかと思えます。これは地方創生においてとても重要なことではないかと感じています。

山極さん、松山さんは御専門の場で、様々な方と触れあう機会も多いと思いますが、その経験も踏まえながら、御専門分野を中心に、今後、京都の未来のためにどのようなことに取り組んでいくか、どのような取組ができるか、一言ずつ頂きたいと思えます。

山極総長

私の専門はゴリラですから…。

ひとつ言わせてもらおうと、これからの時代はひとつの都市、ひとつの国で考えるのではなく、「人間」ということで考えないといけないと思っています。私はゴリラの研究を通じて人間を外から眺め、原点に立ち返って人間であるべきためにはどういう条件が必要か、人間と動物は何が違うのかということはずっと考えてきました。

実は、現在科学技術が先行し、「こころ」の問題が置き去りにされています。しかし、「こころ」は技術が作ったものではなく、人間の身体が先にあると、身体的な特徴ができると共に、「こころ」が徐々に形成されていったのです。だから、身体と「こころ」は共にある。技術と「こころ」は共にあるわけではないのです。それを考えるのであれば、人間としての進化の歴史を踏まえて、今、まさに人間としての哲学、人間としての思想を新たに造り替えないといけない時代に来ていると思えます。

そして、技術よりも文化の方が、歴史が古い。ちょっと言い過ぎかもしれませんが、だから京都はその意味で、新しい思想、新しい世界観の中心になっていく素質があり、条件も整っていると思えます。

井上アナウンサー

先ほどの二重生活のように、どのような「文化を大切にしていける生活」、「こころ」を豊かにしていける生活」ができるのだろうか、という点で言いますとどうですか？

山極総長

人間としての特質を生かすということです。人間以外の動物は、ある集団に属したらその集団にしか自分のアイデンティティを持ってませんが、人間は、どの文化でもそうですが、2つ以上のアイデンティティを持っています。京都の文化に属する自分と、広島に属する自分、あるいはイギリスに留学経験があれば、イギリスのことも知っていて英語も話せる自分というように、自分を多面的に演出も統合もできる性質を持っていて、そのうえでいろんな人達と協力できます。だからこんなに大きな複雑な社会をつくったのです。それをもっと生かしましょうと。

特定の小さなコミュニティの中だけで生きるのは人間的ではありません。もっと自分を解放していろんな面の自分を発見しながら生きることができるのだから、そういう社会を演出していくことが、人間にとって幸せなのではないかと思えます。

井上アナウンサー

日本人にはそういう素質があるというお話ですね。

山極総長

そうですね。日本は江戸時代に300年近く鎖国を経験しました。だから急激に文明開化が起こったのですが、そのとき、急速に欧米文明を導入した歴史を持っています。それは今、アジアや南米、アフリカが体験していることですが、そういう歴史性を踏まえながら、そういう国々と新たな関係を結べる経験を持っています。これは重要なことで、日本人が国際的な舞台に立つ上で生かせる経験はたくさんあると思います。

井上アナウンサー

ありがとうございます。松山さんはいかがでしょう？

松山副住職

将来について、京都に対して2つ。自分ごとで1つあります。

まず、京都に対してですが、人口の話も出ていますが、私は生きている人にこだわり過ぎかな、と思っています。3箇月前に京都の足立病院で娘が生まれたのですが、両隣が中国人でした。中国でのお産は非常に不安だと。京都に来たら安心して子どもが産めると。わざわざ中国から子どもを産みに来ている人がいっぱいいるのです。私は、それでもいいと思います。安心して京都で子どもを産んで、帰ってもいい。そういう生まれる前の子どもにフォーカスしていくのも1つだと思います。

最近、うちの寺も檀家が増えていますが、ほとんどが京都以外の人です。東京や福岡など。この前はフランス人が檀家になりたいと来ました。要は、今の世の中、単身赴任は当たり前、海外赴任する。そうすると、将来東京に戻ってくるかどうか分からない。その中で自分の墓をどうするかと。京都なら本山もあるし観光地も多いからお墓参りにも来てもらえるのではないかということで、京都の寺に眠りたいという人が結構いるのです。そういう人達を受け入れていくのも1つだと思います。

共通するのは生まれる前でも死んでからでも、皆さんが求めるものは「安心」です。安心が提供できるのは、京都の強みなので、これをもっと極めていくべきです。

「自分ごと」としては、一個人の意見で、京都新聞とかに明日書かれたら困るのですが、私の遠い将来の希望と考えてもらいたいのですが、最近檀家周りをして感じるのは、単身の男性で、親の介護している人が目立ってきています。日本は東京オリンピックが終われば、たぶん国中介護スパイラルになるでしょう。今まで介護は女性の仕事というのが一般的でしたが、男性1人で両親の介護をする人が結構増えています。そうすると、会社は絶対に辞めないといけません。

女性はそういう条件でも結構社交的な方が多いので、介護がなくなると社会復帰できる方が結構多いのですが、男性にはできません。1回会社を辞めて、社会との繋がりがなくなると社会復帰できない人が本当にいっぱいいます。

私が世の中で1番困っているのは介護を抱えている人達で、今後増えていくだろうなと思っています。昨年、私の修行道場の師匠が亡くなられたのですが、昔から禅僧は、自殺はしないが自殺行為をして死んでいきます。一休しかり、沢庵しかり。生き切って、いよいよだと思えば飲まず、喰わずで過ごす。すると10日くらいで自然に息を引き取っていく。禅僧は遺偈（ゆいげ）という辞世の一句を書いてから亡くなるのが通例ですが、私の師匠もその遺偈を書き、「ワシの遺偈はその机に用意してあるから」と言って、本当にその2日後に亡くなられた。

今、皆さんが困っているのは健康寿命と実際の寿命のギャップであり、それで、本人も家族も苦しんでいると思います。私は「尊厳をもって自分の人生を締め括る」、これは凄く大事なことです。病院からはできないし、もちろん行政もできません。やはり、神社仏閣などの宗教施設から、尊厳をもって自分で人生を締め括れる施設なり病院なりがあり、そこにお寺の坊さんが積極的に関わっていけるようなものを、京都からできたらいいな、と思っています。具体的なプランがあるわけではありませんが、それが必要で、それを京都からやっていけたらいいなと思っている次第です。

井上アナウンサー

ありがとうございます。まさに今の話も「こころ」の問題であるな、と思いました。最後に今、お2人のお話を聞いて、門川市長、いかがですか？

門川市長

山極総長の基調講演も含め、京都のあらゆる強みや特性を連携して世界と繋がったときに、京都のまちが世界の人々の幸せにも平和にも学問や芸術の発展にも寄与できるし、もちろん、京都市民も幸せになれる、こういう趣旨であったと思います。しっかり、各政策に落とし込んでいきたい。より一層のご指導をいただきたいと思います。

松山先生の最後の話は非常に興味深い話で、医学界でも今年、医学会総会が4年ぶり、実質は8年ぶりに京都で開催されました。従来の医学会総会は医者だけの総会でしたが、今後は終末医療や介護も含め、患者や市民と双方向の医学会でないといけないということで、関連事業を京都で行いました。今のままでは、10年後には施設だけ、あるいは在宅だけで100万人の介護職員を確保しないといけません。さらに介護のために退職する人がもの凄く増えているのも事実です。健康寿命を延ばすと同時に人間の生き方や死に方問題も含め、大変な御提起でした。こういう議論ができるのも京都ならではのと思っています。ありがとうございます。

松山副住職

今の話の続きですが、先ほど山極先生とその話をされていて、ゴリラは皆、健康で亡くなると。皆餓死するのだと。

山極総長

私と同じ年のゴリラが上野動物園にいて、彼の飼育係も僕と同じ年で、3人同じ年で長生きしようねって言ってたのですが、ゴリラ（ブルブル）は45歳で亡くなりました。随分前の話ですが、そのとき、死ぬ2週間前から全く餌を食べなくなったんです。体は全然悪くないのです。

しかし、飼育係が「ブルブル死ぬよ」と言う。「だって決意したかのように食べないんだ」と。それで、すーっと灯火が消えるように亡くなりました。野生のゴリラの死に目には大体会えないのですが、2、3回会った経験からも、本当に皆健康で亡くなる。食べなくなる。これは動物の、自然の終わり方としては一番正解なのではないかと思いました。やはり、食べることが生きること、というのが動物の生活なんです。生きることを止める時は食べることを止める時なんです。それを痛切に感じました。

先ほどのお話を聞いて、禅僧は、やはり、自然の中に身を移すのだと思いました。

井上アナウンサー

では最後に市長から改めて一言お願いします。

門川市長

ありがとうございます。京都ならではの地方創生、京都創生を進めていきたいと思っています。そしてこれは、何度も言いますが議会や審議会でも議論していただいています。市民の皆さん一人一人が「自分ごと」、「自分たちごと」、「みんなごと」として考え、行動していただく。それに対して的確に答えていける行政でなければならない、ということで、先ほども申し上げましたが、そういうことを市民の皆さまにお願いしたら、137の御提案を頂きました。

水準の高い提案がたくさんあり、これをホームページにアップしたら、一緒にやりたいという人からメッセージが来ている。これは京都の地域力、歴史力、文化力、そしてそれぞれの方々の人間力だと思います。これを山極総長は「連携」とおっしゃいましたが、その連携の場づくりを私達は大いにさせていただき、また、京都市の政策にも落とし込んでいきたいと思っています。

とりあえずの京都創生のプランは9月中には作り上げたいと思っていますが、なお、いろんな提案を引き続き募集しています。同時に今日頂いた御意見をしっかりと拝読し、市民の皆様からの御意見として大切にしていきたいと思っています。

今日は本当にありがとうございました。